

# 十段物語



## 第11回

「努必達」武專出身の寝技の名手 栗原民雄

本橋 端奈子

生涯ただ一度の敗北を喫する



栗原民雄十段

栗原民雄は明治29（1896）年5月21日、兵庫県姫路市博労町に生まれた。父は内科医を営む栗原良順である。体は小さかったが、負けん気が強くまた面倒見も良かったため、餓鬼大将として常に地元の子供たちの中心的存在であったという。栗原が10歳の頃、友人との遊びの最中に誤って田んぼに転落し、ひどい捻挫を負ってしまうという出来事があった。冷や汗が出るほどの痛み

だったが、「男子たるもの、ささいな事で泣き言を言うようでは一人前の人間とはなれぬ」と日ごろ父から言われた言葉を思い出し、親にも言わず頑張り通して2日間をやり過ごした。しかしこれがいけなかったのか、日に日に捻挫は悪化し、挙句足の切断を迫られるまでになる。結局栗原は、父の必死の介護のおかげで切断こそなんとか免れたものの、一年半にも及ぶ療養入院を余儀無くされたのである。この時諦めて足を切断していたら、十段栗原民雄は存在し得なかったと言えよう。

栗原は、遅れていた学業を取り戻すため必死に勉強し、明治42（1909）年13歳にして当時難関と言われていた兵庫県立姫路中学校<sup>2</sup>に入学を果す。ここで彼は柔道と剣道といった武道の授業に強く興味を惹かれた。そして中学3年15歳からは、更に専科を柔道と決め打ち込ん

でいくのであった。

そして立技に自信をつけ始めた頃、栗原は初めての対校試合に出場し、兵庫県姫路師範学校の山形為一とあたることとなる。

立ち上って組んだ瞬間、キャリアの違いは判然としていた。栗原は「アッ」と思った。とたんにカァーッと顔が熱くなった。山形は悠々と右自然体に組む、栗原もさらばと左自然体に組んだ。そしてそのまま三十秒、自分の胸の動悸がそのまま相手に伝っているのではないかと思う程激しくなった。わずかに三十秒が一時間にも二時間にも思えるくらいである。栗原はあせり気味に左へ移動しながら右足払を放ったが山形はびくともしない。かわって山形は右釣込腰を掛けて来たが栗原は必死に引き手を振り切って防いだ。機をとらえた栗原、得意の左釣込腰をか

ければ、山形の体浮いてあわやと思われた瞬間、山形は栗原の後方に大きく廻り込んで栗原の体を崩し、横に倒して得意の寝技に持ち込んでしまった。栗原下から必死の防戦することしばし、だが寝技巧者の山形うまく栗原の両脚を制して、するすると「けさ固め」に入れば、審判すかさず「抑え込み」を宣言する。栗原は渾身の力をふりしぼって逃れんとしたが山形得意の「けさ固め」に、がっちり抑え込まれては万事休す。まことにあっけない敗北を喫してしまった。<sup>3</sup>

山形の強烈な固技になす術なく敗れた様子が見て取れる。この敗北が余程悔しかったのであろう、以後栗原は大日本武徳会の道場・武徳殿や、根木金一二段<sup>4</sup>の道場へも足繁く通い、投技だけでなく固技の練習に心血を注いでいくのであった。この山

形に喫した一敗こそ、栗原の生涯ただ一度の敗北である。

### 柔道家となることを決意

18歳にして早々に武徳会初段を取るなど、柔道に力を入れていた栗原だが、学業もおろそかにはせず、優秀な成績で姫路中学を卒業し、将来は父と同じく医者になろうと決意して、京都の第三高等学校<sup>5</sup>の受験を控えていた。しかし折悪しく重い脚氣を思い、受験できずに1年間病床に伏してしまう。夢を断たれ意気消沈していた栗原であったが、彼の柔道の天分を惜しんでいた根木は、これを機に京都の大日本武徳会武術専門学校<sup>6</sup>への入学を熱心に勧めてきた<sup>7</sup>。そして栗原は、日本一の柔道家になれる、という根木の言葉を信じ、柔道家として身を立てていく決心を固めたのである。武専への入学は大正4(1915)年4月、栗原

19歳の春であった。

武専入学に際して、根木の幹旋を受けて栗原の保証人には武専の教授を勤める磯貝一。になってもらった。そこで栗原は磯貝のもとへ挨拶に出向き、柔道修行上のアドバイスを請うた。先日来、栗原の武徳会での稽古を見ていた磯貝は、「成功は運、鈍、根による。お前はちと鈍である。この鈍を征服するのは根である。努力精進を怠るな」と言った。栗原はハッとしてこの言葉をかみしめた。確かに自分は「鈍」である自覚がある。この「鈍」を切り拓くには、一念を持って石に齧り付いてでも修行に励む「根」を貫くしか道は無い、と覚悟を決め、「鈍根」を念頭に武専での修行に身を投じて行くのであった。

栗原は稽古は一日も休まず、人よりも1本でも多く稽古を積んだ。また毎朝、武専の裏にあった吉田山へ

駆け登り、老木や岩を相手に打込に励み身体を練った。このような努力はやがて実力となって現れ、武専入学から僅か4ヵ月にして武徳会二段への昇段を果す。これは武専同級生中トップを切る壮挙であった。

大正6(1917)年、3年生になった栗原は武専の生徒らと講道館へ出稽古に行くことになった。春季紅白勝負への出場を目的とした上京である。これに先立って同年1月に講道館への入門手続きも行い、栗原は武徳会仕込みの実力を認められて初段に編入され、その後すぐに二段扱いとなった。あこがれの講道館である。どんな猛者がいるのか、否が応にも期待は高まるが、反面、武徳会出身として負けてはならないという気概も持っていたであろう。そして、白軍二段の大將格として出場した栗原は、居藤高季二段ら3人を屠り、さらに一人と引き分けて、成績

抜群によって三段を許されたのであった<sup>10</sup>。

翌大正7(1918)年、22歳で武専の卒業試験に臨んだ栗原は、武徳会三段の五人掛を見事勝ち抜き、武徳会四段に昇段して主席で卒業となった。四段での卒業は武専始まって以来初の快挙である。栗原はこの時の感激を後々まで人に語っている。そして、一度は伊勢の神宮皇学館<sup>11</sup>に柔道教師として赴くも、すぐに武専に戻り、助教授として柔道に専心して行くのであった。また、大正8(1919)年の講道館春季紅白勝負では、またしても抜群で四段、大正11(1922)年には五段、昭和3(1928)年には31歳にして六段と異例のスピードで段を重ねている。そしてこの頃には、「京都に豪勇栗原民雄あり」と全国に名を轟かせる存在になっていたのであった。

## 牛島辰熊との天覧試合

栗原は平素から撰生に努め、午前6時起床午後9時就寝、食事も1日3回必ず決まった時間に摂るなど、規律的生活を重んじてきた。また磯貝一に教えられた「鈍根」を掲げ、ルソーの「熱心は才能を補う」を motto に、立技は武専で寝技は教師をしていた三高で、毎日三時間もまさに年中無休で稽古を続けた<sup>12</sup>。技は、合理的に前後左右に利かせて出来得る限り無理をせずに、相手の崩れた方向に適宜応変して色々な技を出せるように特訓を重ねたという。また自分に厳しい反面、生徒には徹底して丁寧な指導に努めた<sup>13</sup>。そんな栗原の人柄に、彼を慕う学生は頗る多かった。

栗原は自ら「試合の心得」というものを作り、道場などに掲げ、兎角勝利至上主義に走りがちな学生らにも徹して守らせている。

### 試合の心得<sup>14</sup>

- 一、敵を知り己を知れ
- 一、平気であれ<sup>15</sup>
- 一、頭を働かせよ
- 一、公明正大堂々と戦え
- 一、礼儀作法を守れ
- 一、規律節制を守れ
- 一、審判員の命令採決には絶対服従のこと
- 一、試合の堂奥<sup>16</sup>に入るよう精進せよ<sup>16</sup>
- 一、試合後は光風霽月<sup>17</sup>の態度であれ<sup>17</sup>

清廉で、己を厳しく律する栗原の人柄がよく表れている訓示であると言える。彼の長い柔道人生において、訓示の通り一貫して公明正大に大小數十試合に臨みながらも、先述したとおり敗北は中学時代に喫したただ1度だけであった。ここからも栗原の比類なき強さが窺い知れるであろう。武専の第18期卒業生である高木栄一郎などは、後に往時を回想して「私の四十年の稽古中、固め技で（栗

原）先生を負かした者はいないだろうし、投げ技で一本でも投げた者は生涯の語り草にしているほど猛烈な稽古だった<sup>18</sup>」と述べているほどだ。中でも名勝負として語り継がれているのは、昭和4（1929）年5月33歳で臨んだ牛島辰熊との天覧試合決勝戦である。当時、天覧に供されることは至上の名誉であり、出場が決まった時には親類は勿論、恩師である磯貝も非常に喜び、是が非でも優勝するように彼を鼓舞した。栗原は、磯貝が自分を日本一の実力と常日頃買ってくれているのを知って<sup>19</sup>、恩に報いようと、勝利のため壮絶な猛稽古を開始した。しかし試合を半月後に控えた4月、不幸にも栗原は武専での稽古中、右膝を捻挫してしまふ。思いの外怪我はひどく、試合1週間前になってやっとどうにか歩けるようになった程度であった。だが、彼を応援してくれる磯貝や、ひいて



天覧に浴した柔道選士ら 前列左から佐藤金之助、栗原、牛島、安部英兒

は武徳会の名譽のため、決死の覚悟で栗原は試合への出場を決めた。上京してからも痛み止めの注射を打ち続けるほどの怪我であったという。

天覧試合は、須藤金作をはじめ猛者揃いの番組ではあったが、栗原は壮絶な戦いを経て勝ち上がり、遂に牛島との決勝戦となった。試合の模

様を以下に引用する。

「はじめ！」表審判永岡八段<sup>20</sup>の声は凜として場に響いた。とたん両雄の眼ギラリと光るや右方より栗原、左方より牛島互に小手を挙げた敢然と躍進する。(略) 突如、牛島の右手は手探るが如く、内側から、敵の左襟にかかった。「ア、右手が引くぞ」心ある人々ハッと膽を冷やす時、何さま牛島は、その左手に敵の右袖を引きつつ、一気にググッと引かんとした。云うまでもなくこれ牛島の誘い、彼れ一流の右内股か、乃至また寝技に行かん策戦、サテハ危うしと見る時早く、栗原は、牛島の右手の内側へ、パッと左手をさしかえつつ、グッと敵の左襟を引掴んだ。牛島の右は殺された。ここに形勢は一変、牛島は、その右を殺されて自由を失ない、それに逆に、栗原の左手は、驚くべき威力を發揮しつ

つ、グイグイ牛島の陣営に肉薄し来た。まさにこれ、敵の持てる武略を咄嗟に奪い取って、逆にその武略を相手の的に擬して迫るもの、若し、この儘の形勢を以てすれば、栗原の右手は迅く敵の左袖をとって彼れ得意の釣込腰、乃至また大内刈の強引となって閃めくに違いない。されば牛島も、今は寸毫の猶予もなり難き形勢、謂うならばこれ、身断崖に押しつめられて眼下深淵に臨むが如し。「エイッ」果せるかな栗原の左釣込腰はカッキリ這入った。危いかな牛島、然るにその時最早容易にのがるべくもないと思われた栗原の左手をば、己が右手を以てピンと切った。しかも敵体の崩れに乗じ押し倒したが栗原警戒して敏捷<sup>すばやか</sup>く起ち、起つや直ちに巴投に奇襲したが、牛島がつきと耐えた。(略) 機をはずさず栗原の寝技は来た。

彼れは、倒れし敵の両脚を、両手に抱え上げ気味にして片膝つき、他の一膝を折って万全の戦い、これからジワジワ敵を押えにかかろうとする形勢である。「サテハ！」観衆膝のり出してにじり出たが、この時栗原悠場迫らず、少しも焦らず、その儘の姿勢を以て機を見ている。しかも下なる牛島も亦動かない。起きようとしなない。ただ敵の仕掛けを見て一氣にハネ返さんとしてゐるものの如くだ。併しもう所定の時間を過ぎてゐる。果して如何と見てある時、俄然牛島の眉はピリりと動いた。同時に彼れは一氣に身を捻転しつつ、その足を強力に引き抜けば、敵の手はズボリと抜けた。この機！牛島は猛然としてはね起きた。しかも立上があれば、また、寸毫の猶予もあらせず、猛然髪を慄わしてツカヅカと突進した。満場、この光景に

御前をも忘れてドツとどよめいた。(略) 牛島無念とばかりに透かさず抑込むを栗原の俊敏、忽ちこれを返して崩横四方固のかたちを掬い上げ、その体はのしかかり気味、而かもその左手を支え棒にして応変の用意、これいよいよ出でていよいよ妙なる理詰めの戦法、されども牛島此処に敗れて堪るかと憤然力闘、両脚をもて栗原の体を巻き込み、抑込とはならず、遂に牛島の斃而後己む底の猛闘に栗原の抑手殆ど不確實となった。(略) 永岡審判は山下、田畑の両審判に目配せするより早く「やめ！」(と宣告した。)<sup>21</sup>

の勝利を無上の喜びとし、下賜された恩賜刀を終生大切に座右に置いていたという。

その後も栗原は、昭和8(1913)年には七段、同12(1937)年には八段と昇段を重ねて行き、武専の主任教授になる傍ら、京都府警・京都帝国大学・京都蚕糸専門学校などでも指導を行っている。また、同19(1944)年には東京オリンピックク柔道委員を拜命しているが、戦況の悪化により開催されずに終わった。

### 公職追放後も柔道一筋に

大戦の混乱の中、大日本武徳会は、政府の外郭団体、民間団体と姿を変え、ることを余儀なくされる。生徒の殆どは徴兵適齢期を超えていたために次々に応召され、残った者も勤労動員に参加するなどして柔道が出来る状態では無くなっていった。栗原



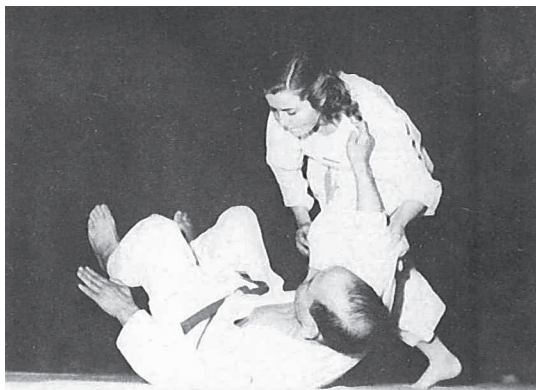
自身も学徒勤労隊の監督としてその任務に当たっていた。そして終戦後の昭和21（1946）年11月、GH

Qによりとうとう武徳会は解散を命じられたのであった。当時数千万円にのぼる財産は全て没収という、非常に厳しい処遇も加えられた。武徳会の解散によって下部組織であった武専も当然廃校となってしまった。これに伴い、栗原も含め1300人以上が公職を追放されることとなる。まだ中学生の子供たちを抱えた栗原は、以前取得した柔道整復師の免許を生かし、接骨院を開くことで何とか糊口を凌ぐのであった。また、接骨院の隣に栗原道場を建て、青少年らの育成にも努めた。栗原の人柄もあってか、接骨院と道場は非常に繁盛し、特に道場は日に日に入門者が増え続け、2部制にして運営するほどの人気となる。この間の同23（1948）年5月、栗原は公職

追放中の身ながら、講道館より九段に列せられている。

昭和26（1951）年になってようやく公職追放が解除され、栗原は即時、京都府柔道道場連盟の会長に推され、また京都府警察柔道師範としても迎え入れられることとなった。またその後すぐに、同年6月より嘉納履正館長の欧州行に随行してフランスで柔道指導を行うなど、講道館の中でも失くしてはならない存在となっていたことが窺える。そんな中でも、強制的に解散させられた武徳会を無念に思う人々からの想いを受けて、武徳会再建を目指す活動も行っている。

また、栗原は正しい柔道普及発展を目指して、関西発の柔道機関紙の発行にも携わっていく。これは、もともと武専卒業生の新井佐市が戦後の苦境の中にあつて私財を投じて発行していたが財政難などから廃刊に



フランスでの指導稽古

なったものを、栗原が惜しみ編集名義人を受け継いだのであった。ここに栗原が著した「編集名義人となつて」の一文を掲げる。

往時は東に講道館あり、西に武徳会あり、時には少しくらいの摩擦もあったが、常に緊密に提携し合い、両者に属する修行者も、東西

に偏せず、是を是とし非を非としていたが、このごろは、東におもねって、西の屍に鞭打つ議論を建てる者が往々にしてある。言論自由の戦後派として、かつては武徳会の理事として働き、それがために追放を受けたものまでが、武徳会といえ、あるいは伏魔殿のごとく、あるいは講道館の反謀者のごとくのものとして講道館に忠勤を抜きん出ている。(略) 私は武徳会並びに武専に三十年の恩顧を受けた者であり、その再興を念願するや切なるものがある。(略)だが、私は武徳会を再興して講道館に盾つかんとするものではない。大局的にいえば、武徳会は講道館に協力して全国的組織網を、最大限に活用して柔道の普及発展に尽力したことは、多大なものであって、戦前の隆盛の一半は、武徳会の功績に負うところであると、私は確

信している。私は講道館に対しては、故嘉納治五郎先生の知遇を受け、その御生前に八段を、現館長には九段を免許せられ、また渡欧に当っては、講道館より一方ならぬお世話になっている。私は現館長の公平無私、円満なご人格に対しては常に敬意を表し、信頼を寄せている(略)それ故に現在横化する、為にせんが為の、東におもねって西を誹謗する言論は、私の与しあたわざるところである。私は道のために凶って最も厳正公正に立論したいと念願している。(略) 故嘉納治五郎先生のご在世時には、「精力善用、自他共栄」が、柔道修行の指標であった。この標語は、フランスの各道場に掲額されるくらいに、世界へ浸透したものであったが、現今は果して如何であるか。柔道は礼に始まり、礼に終わるとされ、礼儀作法が柔道

の一眼目であったが、このごろの不作法さはどうか。(略) 欧州人は柔道に、哲理や宗教的安心を求めんとしている。柔道をより高き理想のものにしないでよいであらうか。<sup>24</sup> 栗原が、武徳会の上層部にいた者として、戦後様々な立場の人々が持つ不満や憤りを一身に受けて苦境に立たされていた様子が、ありありと想像できる。しかしそんな中でも公平厳正な立場を保ち、純粹に柔道普及の為に何が必要か、柔道界を真に思っ堂々と述べているところが栗原の気概であろうか。武徳会が霧消した今、関西から柔道機関紙を発行して意見を述べる事が自らの使命であると考えていた、と察せられる。この機関紙は栗原が体調を崩す昭和40年代まで続けられた。その後、昭和54(1979)年10月8日、心筋梗塞のため死去。享年83歳であった。



講道館は、栗原が柔道界に与えた功績の甚大なことを受けて、前日付で十段位を贈る。史上11人目の名誉であった。

\*引用文献は、現代漢字・仮名づかいに改めた。

\*標題「努必達」は、鈍根を胸に努力を続けた栗原が、好んで用いた揮毫である。

《主要参考文献》

- 『柔道に生涯を賭けて』長谷川泰一著  
京都府柔道連盟発行 1978年
- 《その他典拠・註》
- 1 『柔道に生涯を賭けて』長谷川泰一著 京都府柔道連盟発行 1978年
  - 2 現在の兵庫県立姫路西高等学校
  - 3 前掲註1参照
  - 4 後の八段
  - 5 三高。京都大学の前身の一つ
  - 6 大日本武徳会が武道指導者を養成するために設立した専門学校。後の武道専門学校、通称「武専」
  - 7 「栗原六段と牛島五段」神田伯龍著 『昭和天覧試合』大日本雄弁会講談社発行 1930年
  - 8 後の講道館十段
  - 9 「磯貝、田畑十段を語る」栗原民雄著 『柔道新聞』第137号(1957年)
  - 10 「講道館有段者春季大紅白勝負の記」山崎巨著 『柔道』第3巻第7号(1917年)
  - 11 現在の皇学館大学
  - 12 「柔道指定選士の感想」栗原民雄著 『昭和天覧試合』大日本雄弁会講談社発行 1930年
  - 13 「栗原先生を偲びて」林田悠紀夫著 『柔道』第50巻第12号(1979年)
  - 14 前掲註1参照
  - 15 恐怖心を捨て去り、冷静沈着に平常心で。の意
  - 16 武芸の奥義、秘奥
  - 17 心が清々しく澄み切って、爽やかで蟠りのない状態
  - 18 前掲註1参照
  - 19 『柔道範士磯貝一口述 わが七十年を語る』長谷川泰一著 赤心同盟会東海支部 1940年
  - 20 永岡秀一後の十段
  - 21 「指定選士決勝試合」『昭和天覧試合』大日本雄弁会講談社発行 1930年
  - 22 「武専 その発足から解散まで」『近代柔道』2巻3号(昭和55年3月)
  - 23 「武徳会再建運動に挺身する」栗原民雄著 『スポーツタイムス』第47号(1954年)
  - 24 「編集名義人となって」栗原民雄著 『スポーツタイムス』1943年4月15日号(前掲註1参照)
  - 《写真典拠》
  - 1 講道館柔道資料館
  - 2 『昭和天覧試合』大日本雄弁会講談社発行 1930年
  - 3 『柔道に生涯を賭けて』長谷川泰一著 京都府柔道連盟発行 1978年